



輝く女性が
国。

「外国人問題」
2025年の参院選
争点として注目された



sanseito.jp

吉川りなと家族。

参政党ってどんな党？

参政党は、こんな政党です。

「今の政治を変えなければ日本の未来が不安だ」と危機感を持った一般の人々が集まり「投票したい政党がないから、自分たちでゼロからつくる。」を合言葉に2020年に大企業や宗教団体などの支援のない小さな政治団体として発足。わずか2年後の2022年の参院選で奇跡的に170万票以上を集め国会議員1名が誕生し国政政党になりました。さらに2024年の衆院選では3人の国会議員が誕生、次いで2025年夏の参院選で全国比例・選挙区合わせて14人国会議員が誕生。地方議員を合わせると全体で190名以上の議員が所属し、全国にいる党員が信念を持ってボランティアで支える「小さいけれど力強い政党」。それが参政党です。



This is the political party SANSEITO.

参政党は、こんな国を目指しています。

子供たちのために、頑張れば希望が広がる日本を取り戻したい!!
そのためにはまず日本が大好きな子供を増やし、暗記型の偏差値教育から日本や社会の未来を考える力を育む教育に変えます。日本の文化や精神性を身につけて、お金至上主義の世界を変えていく人材を育てます。また、医療費を下げるために食と健康を見直し、農業を守って安心安全な食糧供給体制をつくります。さらには積極的な財政支出と減税政策で経済を立て直し、少子化を食い止め、過度の移民受け入れや外国資本の流入にも規制をかけます。
参政党は日本とそこに暮らす人々の事を第一に考える「日本人のための政党」です。

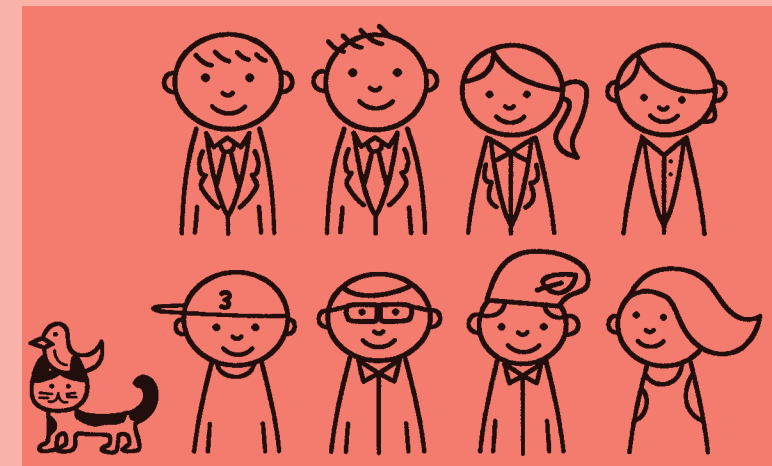


This is the kind of country SANSEITO aims to create.

参政党は、こんな人たちががんばっています。

◎ 議員の人数	・ 国会議員 18 名	・ 市議会議員 129 名
196 名	・ 県議会議員 9 名	・ 町議会議員 23 名
	・ 区議会議員 14 名	・ 村議会議員 3 名
◎ 所属議員の男女比	◎ 所属議員の平均年齢	◎ 支部の数
男性 122 名	47.5 歳	289 支部
女性 74 名		

※ 令和7年12月 現在（詳しくはHPをご覧ください）



These are the people working hard at SANSEITO.

INFORMATION

参政党は国民が学び、考え、政治に参加するプラットフォームです。QRコードから、ぜひ参政党の活動をご覧ください。

参政党の 国会活動

https://sanseito.jp/diet_activity/



参政党の イベント情報

<https://info.sanseito.jp/>



参政党の 理念

<https://sanseito.jp/about/#philosophy>



参政党は、日本全国に289の支部を設立し、「国民が政治に参加する政党」として、特定の支援団体に依存せず、国民の声が届く「新しい政治」を目指しています。各地域で話し合い、学び、協力体制を築きながら議員を輩出しています。

参政党のサポーターになりませんか？

参政党からの活動報告やイベントのお知らせを週に一度メールで配信します。お気軽にご登録ください。 [ご登録はこちら](#)



◎ 参政党はHP/SNSでさまざまな情報を発信しています。是非、下記QRコードからご視聴ください。

赤坂ニュース
News From Akasaka



YouTube 参政党チャンネルでは参政党の記者会見、委員会質問、街頭演説など国民の知るべき情報を発信しています。

参政党チャンネル



参政党・吉川りな議員に聞く、

国会1年目の軌跡と日本、そして家族への想い

—— 国会議員になって1年が経ちました。 当時を振り返って、今どのような心境ですか。

吉川 当選した当初は国会議員として何をどう進めれば良いのか？ 自分に何ができるのか？ 全く分からず、自分の知識不足、経験不足にすごく歯痒い思いをしましたね。国会議員になれば色々なところに影響を与えられるだろうと思っていたのですが、3人の衆議院議員では国会でできることが本当に限られていました。

ただ、所属した法務委員会が、参政党らしい質問ができる場だったので、選択的夫婦別姓や外免切替、外国人の不動産購入などについて問題提起ができました。結果的に質疑を通じて、参政党の考え方を広く発信することにもつながったので、今回の参院選での躍進に少しは貢献できたかなと思っています。

先の参院選を経て党の国会議員が18人に増え、法案提出もできるようになり、国会質疑の機会もたくさん増えたので、やっぱり数の力はすごいと実感しています。

—— 地方議員の経験もなく、いきなり国会議員になられた心境の変化について教えてください。

吉川 もともと私が活動を始めたのは、住まいのある東京1区でした。令和5年、4月の東京15区補選で、参政党として初めての衆議院選挙に挑む候補者となり、結果は悔しいものでしたが、その経験をバネにして挑んだ衆議院解散総選挙では、党の方針で「九州比例ブロック」でのチャレンジとなりました。小選挙区で戦ってくださった候補者の皆さん、そして支えてくださった党员さんたちの努力や思いを背負って国会に送っていただいたことへの責任とプレッシャーは、今も強く感じています。初めてバッジをつけた瞬間も、1年経った今でも、その思いはずっと変わりません。

また、周囲の方々が「国会議員」として特別に扱ってくださる場面も多いのですが、私自身は、自分が特別に偉くなったとは思っていません。むしろ、国会議員という肩書きに伴う重さを感じつつ、「国会議員って本当にそんなに偉い存在なのだろうか」と、自問することもあります。

—— 国会議員としてのプレッシャーはどうでしょうか。

吉川 国会議員としてはもちろんですが、党の副代表としてもとても大きなプレッシャーを感じますね。参政党としてメディア出演の機会が増えてきましたが、まだ自分がテレビ討論の場で堂々と話している姿は全く想像できません。経験も知識も十分とは言えず、不安の方が大きいのが正直なところです。そして何より、応援してくださっている党员の皆さんを失望させてはいけない、という思いが常にあります。とはいえ、いずれ自分にも必ず出番は回ってきます。その時に備えて、先輩方からご指導をいただき、スタッフの力を借りながら、自分自身の力を着実に積み上げていきたいと考えています。

私は、かつて看護師として医療現場に立ち、いまは子育てをしながら国会に立っています。国会議員として求められる振る舞いは心得つつも、「生活者・母親としての視点」を失わないことが、自分に与えられた役割だと感じています。その視点があるからこそ、現場の声や国民の皆さまの実感や、国会に直球で届けられるのだと思っています。

I feel that my role is to never lose my perspective as a consumer and a mother.

Rina Yoshikawa



「生活者・母親としての視点」を失わないことが、自分に与えられた役割だと感じています。



普通の主婦から国会議員となって1年。
地方議員の経験もない一人の母親が、
国会という大舞台でどう闘ってきたのか。
選択的夫婦別姓の質疑で注目を集め、
「参政党＝吉川りな」というイメージを確立した彼女に、
この1年間の心境の変化、子育てとの両立、そして
目指すべき日本の家族のあり方について
率直に語ってもらった。



—— 家庭との両立はいかがですか。自分の時間とのバランスは保てていますか。

吉川 正直、保てているとは言えないですね。休みがほとんどなくて（笑）。今月も前半にお休みを入れていたはずなのに、気がついたら予定が全部埋まっていました。よく見ると、自分で埋めてしまっていたんですけど……。誰かに必要とされたり、勉強会の案内が来たりすると、自分の休みを優先できなくなってしまします。

ただ、これまでも仕事と子育てが最優先で、自分のための時間というものほとんどありませんでした。国会議員になって状況が劇的に変わったというより、ずっとその延長線上にこのような感覚ですね。

—— お子さんの時間は取れていますか。

吉川 子供との時間は、できるだけ作るようにしていますが、正直に言うと十分にはとれていないと思います。でも、家にいるときはできるだけ子供たちの話を聞きますし、寝る時も小学生の息子たちとおやすみのハグをするのを「約束」にしています。

—— その約束はいつ頃から始まったんですか。
吉川 （少し考えて）そういえば私が議員になってからかもしれません。衆院選の間、子供たちは生まれて初めて母親が約1か月家にいないという経験をしたんですね。

毎日何度も未っ子から電話がかかってきて、遠隔で兄弟喧嘩の仲裁をよくしていました。（笑）今思うと、子供たちはすごく寂しかったんでしょうね。それまでは寝る前に私から息子たちの部屋に行っていたんですが、今は息子が寝る前に私を呼びに来るという形に変わりました。

——議員になる前は、どんなお母さんでしたか。

吉川 3人の子供の年齢に近いこともあって、毎日バタバタしていて、しょっちゅう怒ってばかりいた気がします。とにかく朝から年子の兄弟喧嘩は日常茶飯事、家の中は常にぎやかでしたね。

それでも、子供たちが少し大きくなった今では、長女が夕飯の準備を手伝ってくれることもあり、本当に助けられています。先日、長女が作ってくれた野菜炒めが絶品で。子供たち3人を連れてワンオペで保育園に送迎していた頃を思うと、成長のありがたさを感じます。

——ご自身はどんな子供でしたか。

吉川 とにかく負けず嫌いで、何でも1番じゃないと嫌な子供でした。勉強もスポーツも常に「1番でいたい」という気持ちが高く、テストも100点じゃないと悔しくて。先生が「わかる人？」と聞けば、誰よりも早く手を挙げたいタイプでした。

親に怒られた記憶はあまりなくて「遊ぶ前に宿題を済ませなさい」と言われれば、すぐに遊びに行けるように、学校の休み時間に宿題を全部済ませていました。ただ、私が1番を取りたかった背景には、親に振り回いてほしい」という思いもあったのかもしれませんが。6歳まで一人っ子でしたが、小1で弟が、中1で妹が生まれ、急に賑やかになった家庭の中で、どこか寂しさを感じていました。小学校高学年の頃、100点を取って帰っても、あたりまえすぎて褒めてもらえず、悔しくて近くの祖父母の家へ行き、「今日も100点取ったのに褒めてくれへんかった」と泣きついていたのを覚えています。

——おじいちゃんおばあちゃん存在は大きかったですね。

吉川 そうですね。祖父母はいつも私を受け止め、「あん

夫婦別姓などに少しでも慎重な立場を示すと、すぐに反応が返ってきます。

初めての質疑で緊張して手も声も震えていたところに、一斉にヤジが飛んできたときにはさすがに驚きましたね。通常国会の後半は夫婦別姓の質疑が続きましたが、そのたびに多くのヤジがありました。興味深いのは、ヤジを飛ばす方々が「多様性」「人権」を強く唱えているにもかかわらず、自分と違う意見には耳を貸さず、思想の違う相手の人権は尊重しようとしない姿勢が如実に表れていたことです。

——ヤジに傷つくというより、怒りの方が強かった？

吉川 怒りというより、「大人として恥ずかしいのかな」という思いが大きかったです。そして、あれだけのヤジが飛ぶということは、私の発言が彼らにとつて都合が悪いのだろうなと感じました。なかなか動画からは伝わらないかもしれませんが、私が質疑をしている時の非常に冷やかな空気感は独特でしたよ（笑）。

——2年目、議員としてどういったことをやりたいと思っていますか。

吉川 次の解散までは、引き続き「法務委員会」での活動が中心になります。1年目は、とにかく法務委員会の質疑を通じて参政党の発信力を高めることを意識してきましたが、2年目はさらに一步踏み込み、〃日本人ファースト〃の理念を丁寧に説明しながら、外国人政策の課題に真正面から向き合っていきたいと考えています。

皆さまもご承知の通り、これまでほとんど声を挙げてこなかったはずの与党が、参院選の最中から、急速に外国人政策に力を入れ始めました。不毛な手柄争いではなく、国益を最優先に、日本の未来のために何が必要なのか―その本質に踏み込んだ議論と政策実現に取り組んでいきます。

参院選後には、梅村議員を座長とした外国人政策PT（プロジェクトチーム）も立ち上がりました。現場で生じている課題や国民の不安を体系的に整理し、法務委員会での議論とも連動させながら、実効性のある提案へとつなげていきたいと考えています。



また、目先の制度変更や部分的な法整備だけでは、根本的な問題の解決にはつながりません。むしろ国民の分断を助長する恐れすらあります。分断ではなく統合へ向かうためには、「何を、どこまで、どう管理するのか」という明確な制度設計や数値目標を担う指令塔となる機関が欠かせません。

外国人政策は、国の形そのものに関わるテーマです。だからこそ、場当たり的ではなく、責任ある設計と説明を行っていきたいと考えています。

——吉川さん個人として、特に力を入れていきたい政策がありますか。

吉川 人口減少が進む中で、日本の未来を考えるうえで最優先の政策は「少子化対策」と「子育て支援」だと考えています。政府は働く女性の環境整備を進めていますが、当事者であるお母さんたちの声が政策に十分反映されていないと感じています。経済的事情から共働きを選ぶ家庭が多く、「本当は子供との時間を大切にしたい」という思いが支えられにくい現状があります。

統計的にも、第一子出産後に第二子・第三子へと出産が続く家庭は一定数ありますが、そもそも結婚や出産を選ばない若い世代も増えています。子どもを持つことだけが幸せではありませんが、出産や子育てが前向きな人生の選択肢の一つとして受け止められる社会が必要です。今後「出産の保険診療化（無償化）」が進む中で、制度設計は〃お母さんの選択肢を広げる方向〃で議論されるべきです。少子化で分娩施設の集約が進む中でも、病院での分娩だけでなく、助産院など多様な出産環境を維持することが重要です。出産は命を迎える大切な時間であり、安心できる環境で、自分に合った形を選ぶ社会を目指すべきだと考えています。

かつて日本には、地域の助産師が妊娠から産後まで一貫して母子を支える仕組みがありました。現在の周産期医療は高い水準にありますが、一方で地域の「伴走支援」は薄れ、行政が〃切れ目のない子育て支援〃として改めて整備している状況です。かつて地域に自然にあった支えが、今また求められているのだと思います。



たは偉いね」と認めてくれました。祖父母からの温かい言葉が心の支えになっていたのかもしれませんが。振り返ると、祖父母が「あなたは大切な存在だ」と感じさせてくれたことで、自分を信じて挑戦する気持ちを保てたのだと思います。核家族だけでは補えなかった愛情を、祖父母が満たしてくれていたんだなあ。

今も私が家を空けがちな分、実母が家事や子供たちの世話を支えてくれています。側に身内がいてくれる安心感は、私にも子供たちにとっても大きい。褒めたり叱ったり、日常の中で愛着が育まれる―そうした環境の大切さを、今になって深く実感しています。

——そんな吉川さんが、選択的夫婦別姓の質疑を担当されることになったのは、まさに運命的とも言えます。この問題は以前から意識されていましたが。

吉川 いえいえ、全く。一度も考えたことがなかったです。——では、どういう経緯で取り組まれたのですか。

吉川 最初は、30年間国会で審議されてこなかったテーマが動き出すということで、推進派の方々が非常に盛り上がりつつある、という印象でした。一方で、私は子供の頃から夫婦が同じ姓であることに疑問を抱いたことがなく、結婚後も夫婦別姓の議論を身近で聞いたことがありませんでした。国会に入ってみて、「国民の世論ありきで議論が進んでいるわけではない」という現実を、このテーマを通じて実感した出来事でした。

——吉川さんご自身は、結婚して姓が変わることをどう感じましたか。

吉川 23歳で結婚しましたが、確かに手続きは面倒だなとは思いました。でもそれ以上に、名前が変わることで「家族になった」という実感が湧いて、どちらかといえば嬉しさのほうが勝っていました。ところが推進派の方々からは「押し付けられている」「これは私の名前じゃない」「アイデンティティの喪失だ」といった声が多く、自分の感覚との大きなギャップを感じました。

——その質疑の際は、ヤジが飛んだと聞きました。

吉川 はい、初回から飛んできました。法務委員会は〃非常に左派が強い〃委員会で、LGBTやDEI※、

制度や経済支援だけでなく、価値観や教育を含め、社会全体で子育てを支える意識を共有すること。出産や子育てが「自然な人生の選択肢」として肯定できる社会環境を整えること。それが、私が取り組みたい少子化対策の本質です。現場の声を基に、子育て世代に寄り添う政策を提案していきたいと思います。

——最後に、日本がどうなっていけばいいか、そのために吉川さんがどういう役割を果たしていきたいか、お聞かせください。

吉川 私は三人の子供を育てながら看護師として働いてきました。一人目、二人目は産後一年以内に、三人目は経済的事情から育児休暇を取らずに復帰しました。当時はワンオペで、毎日時間に追われ、子供たちに十分向き合えなかった記憶が今も忘れられません。おむつが取れた日や初めて歩いた瞬間など、大切な記憶がほとんど残っていないくて。だからこそ、少なくとも0〜3歳ごろまでは、子育てを優先できる社会を政治が守るべきだと考えています。子供はやっぱり「お母さんがいい」（笑）。

子供が安心できる存在との「愛着形成」を支える環境整備が不可欠です。子供の心が満たされれば、非行や引きこもりなどの問題は減らせるはずです。

法務委員会の審議を通して、「保護司」の存在を深く知りました。犯罪や非行を経験した人が社会復帰するには、地域との関わり、人とのつながりが欠かせません。それは、参政党が訴えてきた価値観そのものです。

人は一人で生きていきません。家庭や地域に支えられて成長し、その積み重ねの上に社会が成り立っています。

「母としての経験」と「現場で見た実態」を政策につなげることで、それが私が国会に立つ意味です。国の課題を明確にし、実行力をもって、未来を担う子供たちのために、これからも取り組んでまいります。



吉川 里奈（りな） 参政党副代表・ポッドメンバー。衆議院議員（比例九州ブロック）。国会議員となるまでは看護師として勤務。小中学生3人の子供の母親でもある。国会では法務委員会に所属。

2025年の参院選挙点として注目された

”外国人問題“

そのきっかけは参政党が主張した
「日本人ファースト」でした。



令

和7年7月の参院選では、「外国人問題」が争点として急浮上し、各党がこの問題に触れ、国民の大きな関心事になるという今まではなかった現象が生まれました。ではなぜこの現象が「今までになかった」のでしょうか？それは「外国人問題」について公に意見を表明することで（その内容に関わらず）「差別である」という批判を受ける可能性が高く「選挙に負ける」と多くの政党、政治家が考えていたからです。そんな中、参政党は批判覚悟で「日本人ファースト」というキャッチコピーを打ち出し、あえてこの問題を真正面から主張しました。

その結果、参政党は全国比例で皆様から700万票をいただき14人もの国会議員を誕生させる事ができました。

しかし、これは参政党の選挙戦略の勝利ではありません。我々はたとえ選挙で多くの票を得られなくても日本の問題点を浮き彫りにす

るべきだと考え、このキャッチコピーを打ち出しました。そして当然のように多くの厳しい批判をいただきました。「我々の主張に差別の意図はない」と何度言葉尽くしても「差別主義者」というレッテルを貼られ、大手メディアからも叩かれ続けました。その一方で私たちが驚いたのはその批判以上に国民の皆様から大きな支持をいただいた事でした。「外国人の土地取得の問題」「生活文化の違いに関する不安」「オーバーツーリズム」など私たちが想像していた以上に多くの方が問題意識を持っていたことが明らかになりました。その多くの意識が世論を動かし、この問題を選挙の争点に押し上げました。

つまり参政党の先の参院選での躍進は単に党の戦略の勝利ではなく、多くの批判や偏向報道に惑わされず、選挙のためではなく、日本の未来のための政治を取り戻したいと願う国民の皆様の勝利なのです。

この問題の早期解決を目指して



参政党は外国人問題に特化した政策プロジェクトチームを結成!!
こんな法案の提出を予定しています。

外国人総合政策庁設立

参 政党政策カテゴリーにもあるとおり、外国人に関する課題は関係省庁にまたがり多岐にわたるため、総合的かつ一元的な管理体制が求められます。このため現在の推進室ではなく、新たに「外国人総合政策庁（仮称）」を設置する方向で、プログラム法案の提出を予定しています。

外国人土地法

大 正14年に成立した同法は、外国が日本人の土地所有を制限している場合、日本も同様の制限を行う「相互主義」を規定していますが、サービス貿易に関する一般協定（GATS）に批准した際、日本政府が条件をつけなかったため無効化されています。この法律を現代でも運用できるよう必要な条文を書き入れ、令和の今に甦らせようとしています。この枠組みを基に、土地取得の制限に加え、必要に応じて「収用」まで可能とする一部改正を提案します。

重要土地等調査法

外 国土土地法のみでは規制が不十分であるため、安全保障上のリスクが考えられる注視区域の範囲を広げます。また、より一層厳しく調査し、必要に応じて「収用」まで可能とする一部改正案を提出したいと考えています。

ところで

参院選で参政党が提案した政策は…

提出予定の法案

参

院選挙で参政党が「日本人ファースト」として提案した政策は、日本国内への外国資本などの「静かなる浸透（サイレント・インベジョン）」を防ぎ、国民の生命・財産、そして社会秩序を守ることを最重要課題と位置づけたものでした。

不法滞在者対応の厳格化

特

定技能制度の見直しによる外国人受け入れ数の制限、帰化・永住権要件の厳格化、外国人による重要土地の買収規制など、外国勢力の影響力拡大を抑止するための包括的な対策を掲げています。

さらに、生活保護の原則である「日本国民限定」の徹底、外国人による公的医療費未払いへの対策、偽装留学生の取り締まり強化、制度の抜け穴を塞ぐ改革など。日本の治安・文化・社会インフラを守り、持続可能な国家を築くことを基本方針としました。

詳しくは、「参政党政策カタログ」をご覧ください。



そして

参政党の提案で与党が動いた!?

参

政党が掲げた外国人政策への関心の高まりの中、与党は突如10月に「外国人の受け入れ・秩序ある共生社会実現に関する関係閣僚会議」を開き、「外国人との秩序ある共生社会推進室」に担当大臣を設置しました。さらに、外国人に関する違法行為への対応を強化し、国保未納者には在留資格の変更・更新を認めない対策を準備。加えて、「対日外国投資委員会（日本版CFIUS）」の創設や、外国人・外資による土地取得規制強化法案の策定、外国人受入れの数値目標等を明記した「人口戦略」の策定（合意書）など、一連の政策に着手しました。（25年10月）

さらに

参政党の提案で野党も動いた!?

国

民民主党・玉木代表は8月、外国人総量規制強化を理解し、土地取得規制強化の必要性を表明。立憲民主党・野田代表は8月ネクストキャビネット（次の内閣）に「法務・外国人政策担当大臣」を設置しました。

その他にも問題は山積み!!

オーバーツーリズム

観光客の急増により地域の生活環境が悪化し、交通混雑や治安の不安が広がっています。観光と住民生活の調和を図る持続可能な受け入れ体制の整備が求められています。

学校での多国語対応問題

外国籍児童の増加で、教師が多国語対応を迫られ、授業の負担が大きくなっています。専門スタッフや教材の不足が深刻で、学習機会の格差解消へ制度的支援が必要です。

医療・労働現場の課題

医療や労働現場では言語の壁によるトラブルや制度理解の不足が起きています。受け入れ側の体制強化と、外国人自身への適切な情報提供の両面で対策を進めることが重要です。

外国人参政権

永住外国人への地方参政権付与が議論されていますが、国の根幹に関わる問題で慎重な判断が必要です。地域社会への影響や安全保障面を踏まえ、国民的議論を深めることが求められています。

地域コミュニティの変化

地域に外国人が増える中、生活習慣や価値観の違いから摩擦が生じる例もあります。トラブル防止には双方の理解促進と、行政によるルール整備・情報提供の充実が重要です。

参政党外国人問題PTメンバー

プロジェクトリーダー
参議院議員

梅村みずほ

秩序ある国を取り戻すため、大津議員・中田議員はじめ仲間たちと共に取り組んでいます。是非注目ください！

PT事務局長
参議院議員

大津力

壊れゆく日本社会を国民の力で護りましょう！まだまだ出来る、日本は！

PT事務局次長
参議院議員

中田優子

これまで見過ごされてきた外国人政策のあり方について、新政策とともに今こそ政策大転換しましょう！